群教セ	G06 － 02
	平22.242集

運動好きな児童を育成するための調査研究

── 体育授業における「楽しさ」の分析を通して ──

長期研修員　太刀川　雄一

《研究の概要》

本研究は、児童の体育授業に対する意識を質問紙調査を基に分析することで、体育授業における「楽しさ」を究明するものである。具体的には「体育授業が楽しい」と「運動が好き」という二つの意識の関係を明らかにするとともに、体育授業における「楽しさ」を「技能」、「態度」、「思考・判断」の３観点から分析し、運動好きな児童を育成するための体育授業の在り方を提言する。

キーワード　【調査研究　体育　楽しさ　相関　χ2乗検定　因子分析】

Ⅰ　研究の背景と目的

１　現状と課題

(1)　先行研究の成果と課題

文科省がまとめた「全国体力・運動能力、運動習慣等調査（H21)」の結果から、「楽しく体育の授業に取り組んでいる児童」は、男女ともに体力合計点が高い傾向にあることが明らかにされた。また、「運動やスポーツが好き」と回答した児童の割合が多い学校は、男子の体力合計点が高い傾向にあることが明らかにされた。

群馬県においても、平成21年度に小学５年生を対象に「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」を実施し概要がまとめられている。そして、全国の結果と同じように、「楽しく体育の授業に取り組んでいる児童」は、男女ともに体力合計点が高い傾向にあることが明らかにされた。また、運動やスポーツが好きな児童は、男女ともに体力合計点が高い傾向にあり、運動やスポーツが嫌いな児童は、男女ともに体力合計点が低い傾向にあることも明らかにされた。

神奈川県体育センターが行った「学校体育に関する児童の実態調査（H17)」では、「体育の好き・嫌い」と「運動やスポーツの好き・嫌い」とのクロス集計の結果から、「体育が好きな児童はおおむね運動やスポーツが好きである」と述べている。一方、「体育の好き・嫌い」と「体育の楽しさ・つまらなさ」とのクロス集計を行った結果から、「体育好きはいつも楽しいと感じながら体育の学習をしているのに対し、体育嫌いは楽しいとあまり感じないで学習している傾向がある」と述べている。さらに、児童が自主的・積極的に運動するかしないかは、物理的な条件によって左右されるのではなく、児童自身が「運動やスポーツを好きか嫌いか」によって決定されるものであると述べている。

以上のことから、「体育の楽しさ」が、体育好きな児童を育成するための要因になることは明らかである。また、児童が体育を好きになれば、運動を好きになり積極的に運動をするようになるので、結果として体力が高くなることも明らかである。しかし、「体育の楽しさ」が、「運動好きな児童」の育成に直接つながっているのかどうか、その関係は明らかにされてはいない。

(2)　問題の所在

①　教育全体の流れや方向性

平成20年１月の中央教育審議会答申では、学習指導要領改定の基本的な考え方の一つとして、「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」を挙げている。その中で、「体力は、人間の活動の源であり、健康の維持のほか、意欲や気力といった精神面の充実に大きくかかわっており、生きる力の重要な要素である。子どもたちの体力の低下は、将来的に国民全体の体力の低下につながり、社会全体の活力や文化を支える力が失われることにもなりかねない。子どもたちの心身の調和的発達を図るためには、幼いころから体を動かし、生涯にわたって積極的にスポーツに親しむ習慣や意

欲、能力を育成することが必要である」と示された。この趣旨を踏まえて、小学校学習指導要領体育編では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培う観点を重視し、各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにすること」と明記された。そして、「運動に親しむ資質や能力とは、運動への関心や自ら運動をする意欲、仲間と仲よく運動をすること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるように自ら考えたり工夫したりする力、運動の技能などである」と示している。このことは、「態度」、「思考・判断」、「技能」の３観点から児童を育成することを強調しているものと考える。

これらを背景として、群馬県教育委員会は平成22年３月号の教育広報誌『教育ぐんま』において、今後の取組として「文部科学省の分析結果により、運動が好きな子どもは体力が高いとされている。群馬県教育委員会では、スポーツ健康元気アップ事業や体育授業モデル作成事業などを通じて、運動好きな児童生徒の育成に取り組んでおり、そのことが子どもたちの体力向上につながることと考えている」と述べている。

②　児童の実態

群馬県教育委員会の調査結果によると、本県の小学生（５年生）は、男子は72.6％、女子は54.9％が「運動やスポーツが好き」と答え、男子の72.7％、女子の60.0％が「体育の授業が楽しい」と答えている。この割合を見ると、男女それぞれの数値が近く、「運動やスポーツが好き」と「体育の授業が楽しい」との間に相関関係があると推測できる。一方、「運動やスポーツが得意である」と答えた児童の割合は、男子が46.7％、女子が30.6％となっており、「運動やスポーツが好き」と答えた児童の割合との差があった。このことから、「運動やスポーツが得意でなくても、運動やスポーツを好きな児童」がいることが分かる。つまり、運動が苦手な児童でも、友達とかかわり学び合うなどの「態度」面、運動の仕方を考え工夫するなどの「思考・判断」面が充実することで運動好きになると考えられる。

運動をする子としない子の二極化の傾向は、全国と同様に本県でも見られる。男子は、約12％、女子は約23％がほとんど運動をしていない（一週間の総運動時間が60分未満）という状況である。この問題を解決するためには、運動好きな児童を増やすことが必要であると考える。その理由は、「運動やスポーツをすることが好きですか」についての回答と一週間の総運動時間の関係で、男女とも「好き」な気持ちが強いほど総運動時間が長くなる傾向にあったことからである。

運動やスポーツの上達に関する意識の関連を見ると、運動やスポーツが「できるようになった」、「ややできるようになった」児童の中で、運動やスポーツが「好き」な児童は、男女ともに体力合計点が高かった。さらに、「あまりできるようにならなかった」、「できるようにならなかった」児童の中でも、運動やスポーツが「好き」な児童は、「やや好き」、「やや嫌い」、「嫌い」な児童に比べ、体力合計点が高くなっていた。つまり、運動やスポーツが得意でなくても、運動やスポーツが好きであれば体力が高い傾向にあるということである。

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査（H21）」によると、本県児童の体力は全国平均を下回っており、児童の体力を向上させることは必要不可欠な課題である。しかし、ほとんど運動していない児童や運動が好きでない児童に対し体力づくりを前面に押し出した指導をしても、運動好きにさせるどころか運動嫌いにさせてしまう可能性が高い。これは、学習指導要領の「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培う」という考えに相反するものである。そこで、「運動好きな児童は体力合計点が高い傾向にある」、「運動が苦手でも運動好きな児童がいる」点に着目し、「態度」、「思考・判断」、「技能」のバランスがとれた体育授業によって運動の楽しさを実感させることを通して運動好きな児童を育成し、結果的に児童の体力向上につなげることが望ましいと考える。

２　研究の目的

児童の「体育授業に対する意識」を調査・分析することで、「体育授業が楽しい」と「運動が好き」の意識の関係を明らかにするとともに、体育授業における「楽しさ」を明らかにし、運動好きな児童を育成するための体育授業の在り方を提言する。

Ⅱ　仮説

かかわり合いや学び合いを核とした体育授業を行えば、運動が苦手な児童も運動の楽しさを実感し運動好きになる。（図１）

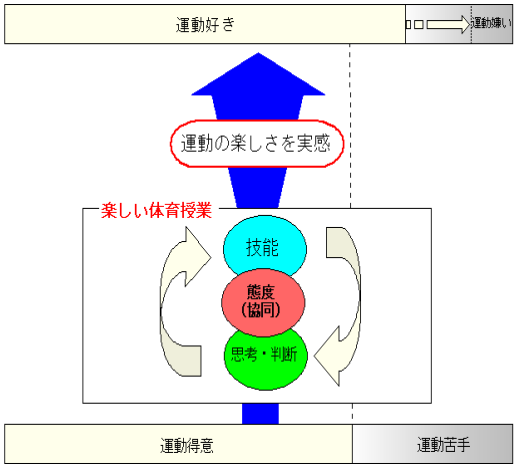


図１　仮説の考え方

Ⅲ　調査対象

群馬県内の公立小学校341校へ通学する小学４年生及び６年生各約20,000人のうち、約1,500人ずつを抽出して標本とする。調査は、４段階評定尺度法を用いた質問紙調査を実施する。

Ⅳ　調査内容

１　調査の基本的な考え方

『学校体育授業事典』（大修館書店）によると、運動嫌いとは「みずからスポーツ活動や身体活動を行うことに対して否定的態度を有する個人の総称」と定義され、一般的特徴として、①過去に経験した運動場面での喜び体験の欠如、②経験してきた体育授業に対する否定的な評価、③運動能力の低位あるいは技能に対する劣等感等があるとされている。このことから、「運動が好き」という気持ちは、「運動の楽しさや喜びを味わった体験」、「経験してきた体育授業に対して『楽しかった』、『わかった』、『できるようになった』、『友達と仲よく運動できた』などの肯定的な評価」、「運動技能に対して劣等感がないこと」等によって生じると考える。つまり、運動の楽しさや喜びを味わい心情が満たされると、児童は心を引き付けられ運動を好きになるのである。そこで、児童が運動に親しむ場として一番身近な体育授業において、児童にとっての「体育授業の楽しさ」を、「技能」、「態度」、「思考・判断」の３観点から調査するとともに、「運動が好きか嫌いか」、「運動が得意か苦手か」、「どの運動領域が楽しくてどの運動領域が楽しくないのか」という点も加えて分析することで、より多くの児童が楽しく取り組むことができる体育授業のための資料を得たいと考えた。

「体育授業が楽しい」の意識を、「技能」、「態度」、「思考・判断」の３観点から分析するのは次の理由からである。日本体育大学教授の高橋氏は、「『ａ技術（戦術）』や『ｂ社会的行動（ルール、マナー）』といった客観的材料を手がかりに、自分たちの能力や関心に応じて『ｃ学び方の学習』が適切に行われれば、『運動の楽しさ』が生み出される」とした。これらａ、ｂ、ｃはそれぞれ、学習指導要領体育編の領域内容を構成する「技能」、「態度」、「思考・判断」に結び付くと考える。

調査対象は、「低学年児童は正確に質問紙に回答することが難しい」、「３年生、５年生は調査時期に未習の領域がある」ため、小学４年生、６年生とした。

２　具体的な内容

小学４年生、６年生に対する意識調査から下記の内容を行う。

①「体育授業が楽しい・楽しくない」の意識と「運動が好き・嫌い」の意識との関係を分析し、相関関係を明らかにする。

②「体育授業が楽しい・楽しくない」の意識と「運動が得意・苦手」の意識との関係を分析し、相関関係を明らかにする。

③「体育授業が楽しい」の意識を、「技能」、「態度」、「思考・判断」の３観点から分析し、体育授業の「楽しさ」の要因を明らかにする。

④「各運動領域」が楽しくできたか楽しくできなかったかを、「運動が得意」な児童と「運動が苦手」な児童に分けて分析する。

Ⅴ　調査の実施

1　調査分析の視点

(1)　調査票

九州大学の徳永氏・橋本氏による研究では、小学生の楽しさの因子として10因子が挙げられている。それらを参考にしながら、学習指導要領体育編の３観点である「技能」、「態度」、「思考・判断」と予備調査の結果から、予想される要素を考え調査項目とした。具体的には、「技能」は〈競争〉、〈克服・達成〉、〈表現〉の３要素、「態度」は〈協同〉、〈賞賛〉、〈健康・安全〉の３要素、「思考・判断」は〈気付き〉、〈理解〉、〈創造的活動〉の３要素で、さらに要素ごとに３項目ずつの質問を設定し、計27の質問項目とした。その他に「体育授業が楽しいか」、「運動が好きか」、「運動が得意か」、「各運動領域（７領域）が楽しいか」についての質問項目を設けた。

(2)　データ処理の方針と分析

「体育授業が楽しい・楽しくない」の意識と「運動が好き・嫌い」の意識の関係を、相関係数をもとに明らかにする。その際、学年別、男女別に分けて分析する。同様に、「体育授業が楽しい・楽しくない」の意識と「運動が得意・苦手」の意識の関係を明らかにする。「体育授業の楽しさ」は「技能」、「態度」、「思考・判断」面から因子分析を用いて分析する。「運動領域別の楽しさ」は、「運動が得意」な集団と「運動が苦手」な集団に分けて分析する。その際、体育授業が楽しくできたかどうかを割合で表した図で示すとともに、実人数でχ2乗検定をかけ、有意差を明らかにして多いか少ないかを判断する。

2　調査項目の選定

因子分析用の調査項目は、表１のように考え、「楽しさ尺度」として27の質問項目とした。それぞれの質問について、「体育の授業で楽しいと感じるか」を「楽しい・やや楽しい・あまり楽しくない・楽しくない」の４段階で回答してもらった。

表１　３観点、９要素、27質問項目の関係

観点	要素	質問項目	
		番号	内容
技能	競争	1	競争したり、勝負したりすること
		10	勝ち負けがどうなるか分からなくて、ドキドキすること
		19	競争や勝負で勝つこと
	克服・達成	4	自分の記録が伸びたり、うまくなったりすること
		13	できなかったことが、できるようになること
		22	自分のめあてに届くこと
	表現	7	曲に合わせるなど、リズムにのって運動すること
		16	新しい方法や動きをつくること
		25	上手な友達の動きをマネすること
態度	協同	2	友達と教え合うこと
		11	友達と助け合って運動すること　＊4年：励まし合って
		20	友達と動きを合わせること（シンクロマット、なわとびなど）
	賞賛	5	がんばっているとき、先生にほめられること
		14	友達から拍手されること
		23	友達から応援してもらうこと
	健康・安全	8	運動をして、じょうぶな体をつくること
		17	けがをしないで運動できること
		26	運動をして、体の調子がよくなること
思考・判断	気付き	3	上手な友達の動きを見ること　《質問2と関連》
		12	友達のよいところを見つけられること　《質問2と関連》
		21	友達にほめられて、自分のよいところに気付くこと
	理解	6	絵やビデオなどで、よい方法や動き方を知ること
		15	自分の動きの、よいところや直したいところが分かること
		24	よい方法や動き方が分かること
	創造的活動	9	チームやグループで、作戦を考えること　《質問2と関連》
		18	ルールや作戦を工夫して、活動すること
		27	練習の方法や場所を、自分の力に合わせて選ぶこと

Ⅵ　研究の結果

1　「体育授業が楽しい」と「運動が好き」の意識の関係

４年男子、４年女子、６年男子、６年女子それぞれについての「体育授業が楽しい」と「運動が好き」の意識を比較（図2、図3）すると、よく似た傾向となっており、学年が上がると「体育授業が楽しい」児童も「運動が好き」な児童も減少していた。実人数をもとにした相関関係の分析（表2）では、高い相関係数が示され、「体育授業が楽しい」と「運動が好き」の間に強い相関関係があることが明らかになった。また、性別でみると男子よりも女子に強い相関があり、学年別でみると４年よりも６年に強い相関があることが明らかになった。

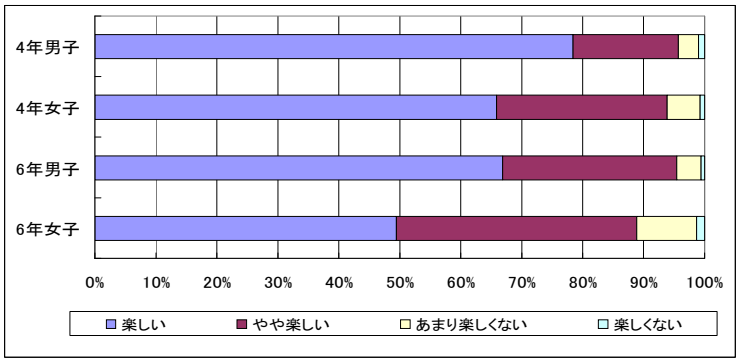


図２　体育授業が「楽しい」の意識

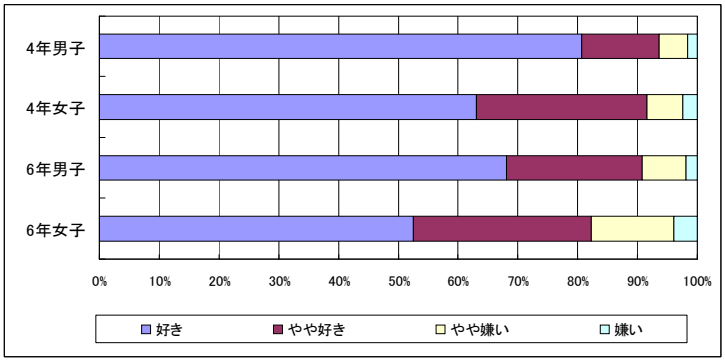


図３　運動が「好き」の意識

表２　「体育が楽しい」と「運動が好き」の相関係数

	男	女
４年	．６４５１	．６８５６
６年	．６８９１	．７３１７

ｐ＜.01

2　「体育授業が楽しい」と「運動が得意」の意識の関係

「体育授業が楽しい」の意識と「運動が得意」の意識を比較（図2、図4）すると、「体育授業が楽しい」児童も「運動が得意」な児童も学年が上がると減少する傾向となった。また、４年男子、４年女子、６年男子、６年女子、すべてにおいて、「体育授業が楽しい」児童の割合が「運動が得意」な児童の割合を大きく上回っており、「得意でなくても体育授業が楽しい」児童がいることがうかがえる。実人数をもとにした相関関係の分析（表3）でも、６年女子でやや高い相関係数が示されたものの、「体育授業が楽しい」と「運動が得意」の間に強い相関関係はないことが明らかになった。

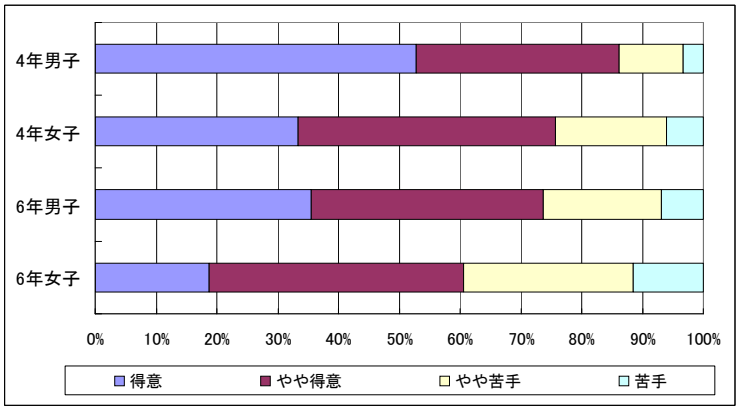


図４　運動が「得意」の意識

表３　「体育が楽しい」と「運動が得意」の相関係数

	男	女
４年	．４６８１	．５５５６
６年	．５８６８	．６１８７

ｐ＜.01

3　「運動が苦手だが体育を楽しい」と感じている児童の体育の「楽しさ尺度」と「因子負荷量」の関係

体育授業における楽しさの要因として考えた調査項目を、「楽しさ尺度」として27の質問項目とし、

回答結果について因子分析を行った。(因子負荷量の数値は各因子と質問項目との相関関係を示す値)

(1)　4年男子

分析結果から、三つの因子があることが判明した（表４）。第一に、「自己実現」因子である。これは、質問22・４・16・13に高い相関がある「技能」面の因子である。第二に、「発見協同」因子である。これは、質問12・２・３に高い相関がある「態度」、「思考・判断」面の因子で、第三に、「賞賛」因子である。これは、質問14・５に高い相関がある「態度」面の因子である。

表４　「楽しさ尺度」の因子分析結果（４年男子）

	質問項目(変数名)	因子負荷量
因子１「自己実現」	5(22)自分のめあてに届くこと。	0.791
	5(4)自分の記録が伸びたり、うまくなったりすること。	0.721
	5(16)新しい方法や動きをつくること。	0.693
	5(13)できなかったことが、できるようになること。	0.648
因子２「発見協同」	5(12)友達のよいところを、見つけられること。	0.684
	5(2)友達と教え合うこと。	0.677
	5(3)上手な友達の動きを見ること。	0.658
因子３「賞賛」	5(14)友達から拍手されること。	0.783
	5(5)がんばっているとき、先生にほめられること。	0.716

(2)　4年女子

分析結果から、三つの因子があることが判明した（表５）。第一に、「安心協同」因子である。これは、質問26・17・11に高い相関がある「態度」面の因子である。第二に、「観察選択」因子である。これは、質問27・３に高い相関がある「思考・判断」面の因子である。第三に、「賞賛」因子である。これは、質問14・23・５に高い相関がある「態度」面の因子である。

表５　「楽しさ尺度」の因子分析結果（４年女子）

	質問項目(変数名)	因子負荷量
因子1「安心協同」	5(26)運動をして、体の調子がよくなること。	0.692
	5(17)けがをしないで運動できること。	0.682
	5(11)友達と励まし合って運動すること。	0.647
因子2「観察選択」	5(27)練習の方法や場所を、自分の力に合わせて選ぶこと。	0.635
	5(3)上手な友達の動きを見ること。	0.634
因子3「賞賛」	5(14)友達から拍手されること。	0.677
	5(23)友達から応援してもらうこと。	0.645
	5(5)がんばっているとき、先生にほめられること。	0.632

(3)　6年男子

分析結果から、二つの因子があることが判明した（表６）。第一に、「発見協同」因子である。これは、質問12・３・２に高い相関がある「態度」、「思考・判断」面の因子である。第二に、「安全克服」因子である。これは、質問13・17・18に高い相関がある「技能」、「態度」、「思考・判断」面の因子である。

表６　「楽しさ尺度」の因子分析結果（６年男子）

	質問項目(変数名)	因子負荷量
因子1「発見協同」	5(12)友達のよいところを、見つけられること。	0.764
	5(3)上手な友達の動きを見ること。	0.741
	5(2)友達と教え合うこと。	0.680
因子2「安全克服」	5(13)できなかったことが、できるようになること。	0.712
	5(17)けがをしないで運動できること。	0.670
	5(18)ルールや作戦を工夫して活動すること。	0.664

(4)　6年女子

分析結果から、三つの因子があることが判明した（表７）。第一に、「発見協同」因子である。これは、質問３・12・２に高い相関がある「態度」、「思考・判断」面の因子である。第二に、「賞賛克服」因子である。これは、質問14・13・５・４・23に高い相関がある「技能」、「態度」面の因子である。第三に、「創造的競争」因子である。これは、質問９・10・18・１に高い相関がある「技能」、「思考・判断」面の因子である。

表７　「楽しさ尺度」の因子分析結果（６年女子）

	質問項目(変数名)	因子負荷量
因子1「発見協同」	5(3)上手な友達の動きを見ること。	0.711
	5(12)友達のよいところを、見つけられること。	0.684
	5(2)友達と教え合うこと。	0.568
因子2「賞賛克服」	5(14)友達から拍手されること。	0.649
	5(13)できなかったことが、できるようになること。	0.623
	5(5)がんばっているとき、先生にほめられること。	0.610
	5(4)自分の記録が伸びたりうまくなったりすること。	0.585
	5(23)友達から応援してもらうこと。	0.568
因子3「創造的競争」	5(9)チームやグループで作戦を考えること。	0.716
	5(10)勝ち負けがどうなるか分からなくてドキドキすること。	0.596
	5(18)ルールや作戦を工夫して活動すること。	0.595
	5(1)競争したり勝負したりすること。	0.566

４　「運動が得意・苦手」と「運動領域別の楽しさ」の意識の関係

楽しく活動できた運動領域と楽しく活動できなかった運動領域を、学年性別ごとに「運動が得意な児童」と「運動が苦手な児童」に分けて分析を行った。

(1)　4年男子

運動の得意・苦手に関係なく、「ゲーム」は楽しくできた児童が有意に多く、「多様な動きをつくる運動」は楽しくできた児童が有意に少なかった。運動が得意な集団では、「浮く・泳ぐ運動」と「表現運動」は楽しくできた児童が有意に少なく、運動が苦手な集団では、「器械運動」と「走・跳の運動」は楽しくできた児童が有意に少なかった。（表８・９、図５・６）

表8　運動領域別「楽しさ」（運動が得意な4年男子）

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	５９４	３２
多様な動きをつくる運動	５５７▽＊＊	６９▲＊＊
器械運動	５８５	４１
走・跳の運動	６０２▲＊＊	２４▽＊＊
浮く・泳ぐ運動	５６５▽＊＊	６１▲＊＊
ゲーム	６１５▲＊＊	１１▽＊＊
表現運動	５６１▽＊＊	６５▲＊＊

χ2（6）＝74.292、ｐｈｉ＝.130、ｐ＜.01　　ｎ＝６２６

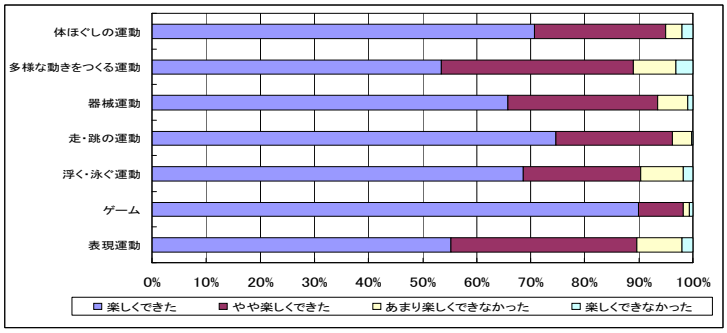


図5　運動領域別「楽しさ」（運動が得意な4年男子）

表9　運動領域別「楽しさ」（運動が苦手な4年男子）

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	８０▲＊	２０▽＊
多様な動きをつくる運動	６１▽＊	３９▲＊
器械運動	６０▽＊＊	４０▲＊＊
走・跳の運動	６０▽＊＊	４０▲＊＊
浮く・泳ぐ運動	７８	２２
ゲーム	８７▲＊＊	１３▽＊＊
表現運動	７０	３０

χ2（6）＝35.296、ｐｈｉ＝.224、ｐ＜.01　　ｎ＝１００

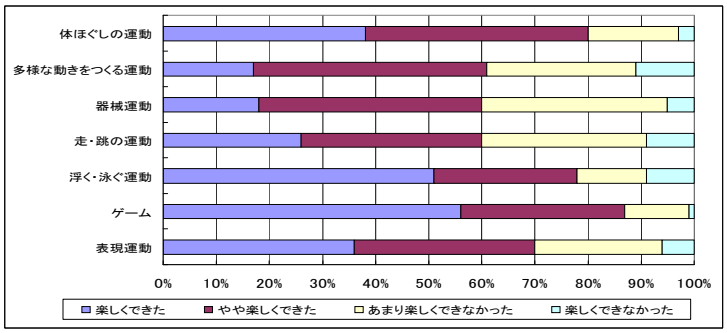


図6　運動領域別「楽しさ」（運動が苦手な4年男子）

(2)　4年女子

運動の得意・苦手に関係なく、「体ほぐしの運動」は楽しくできた児童が有意に多かった。運動が得意な集団では、「浮く・泳ぐ運動」は楽しくできた児童が有意に少なく、運動が苦手な集団では、「器械運動」と「走・跳の運動」は楽しくできた児童が有意に少なかった。（表10・11、図７・８）

表10　運動領域別「楽しさ」（運動が得意な4年女子）

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	５６９▲＊	１８▽＊
多様な動きをつくる運動	５６７	２０
器械運動	５５６	３１
走・跳の運動	５５３	３４
浮く・泳ぐ運動	５４６▽＊＊	４１▲＊＊
ゲーム	５６３	２４
表現運動	５６２	２５

χ2（6）＝15.288、ｐｈｉ＝.060、ｐ＜.05　　ｎ＝５８７

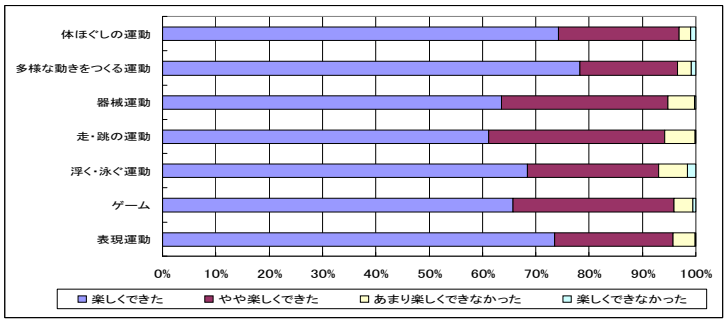


図7　運動領域別「楽しさ」（運動が得意な4年女子）

表11　運動領域別「楽しさ」（運動が苦手な4年女子）

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	１６３▲＊＊	２６▽＊＊
多様な動きをつくる運動	１６２▲＊＊	２７▽＊＊
器械運動	１１４▽＊＊	７５▲＊＊
走・跳の運動	１１４▽＊＊	７５▲＊＊
浮く・泳ぐ運動	１４７	４２
ゲーム	１３４	５５
表現運動	１７１▲＊＊	１８▽＊＊

χ2（6）＝96.256、ｐｈｉ＝.296、ｐ＜.01　　ｎ＝１８９

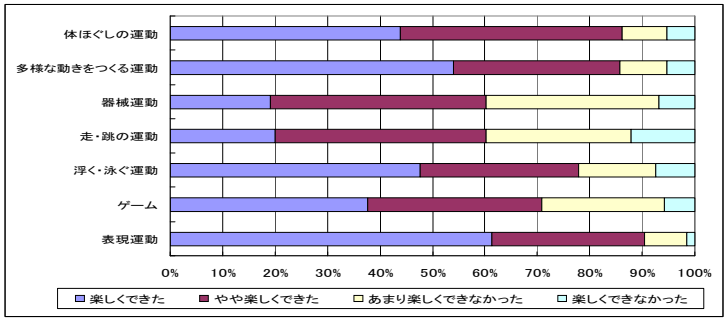


図8　運動領域別「楽しさ」（運動が苦手な4年女子）

注1：表8～15の「楽しくできた」は、図5～12の「楽しくできた」と「やや楽しくできた」を合わせた人数、「楽しくできなかった」は、「あまり楽しくできなかった」と「楽しくできなかった」を合わせた人数。

(3)　6年男子

運動の得意・苦手に関係なく、「体ほぐしの運動」と「ボール運動」は楽しくできた児童が有意に多かったが、「器械運動」は楽しくできた児童が有意に少なかった。運動が得意な集団では、「陸上運動」は楽しくできた児童が有意に多かったが、「表現運動」は楽しくできた児童が有意に少なかった。逆に、運動が苦手な集団では、「陸上運動」は楽しくできた児童が有意に少なく、「表現運動」は楽しくできた児童が有意に多かった。(表12・13、図９　・10)

表12　運動領域別「楽しさ」(運動が得意な6年男子)

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	５４８▲＊	３３▽＊
体力を高める運動	５３１	５０
器械運動	５１５▽＊＊	６６▲＊＊
陸上運動	５４５▲＊	３６▽＊
水泳	５０８▽＊＊	７３▲＊＊
ボール運動	５６８▲＊＊	１３▽＊＊
表現運動	５１４▽＊＊	６７▲＊＊

χ2 (6) ＝65.671、ｐｈｉ＝.127、ｐ＜.01　　ｎ＝５８１

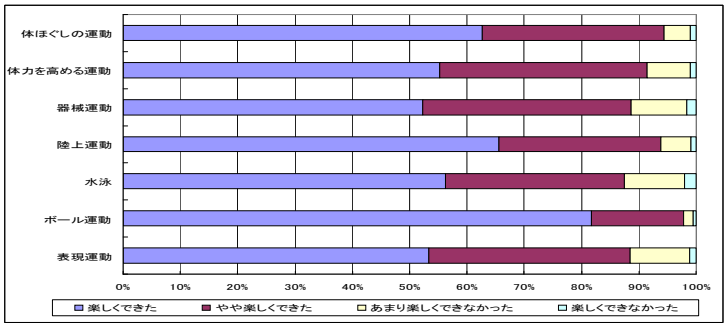


図9　運動領域別「楽しさ」(運動が得意な6年男子)

表13　運動領域別「楽しさ」(運動が苦手な6年男子)

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	１５９▲＊＊	４８▽＊＊
体力を高める運動	１３１	７６
器械運動	１２５▽＊＊	８２▲＊＊
陸上運動	１１３▽＊＊	９４▲＊＊
水泳	１３７	７０
ボール運動	１６３▲＊＊	４４▽＊＊
表現運動	１５７▲＊＊	５０▽＊＊

χ2 (6) ＝49.255、ｐｈｉ＝.184、ｐ＜.01　　ｎ＝２０７

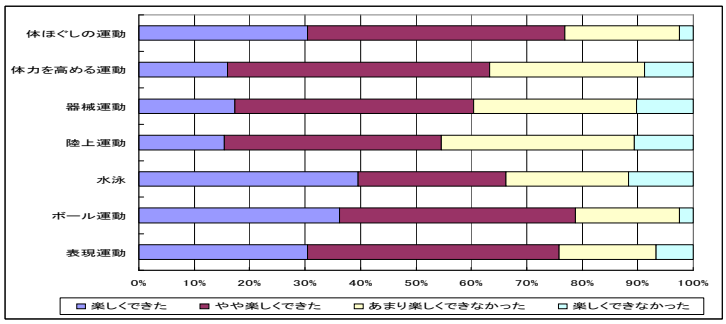


図10　運動領域別「楽しさ」(運動が苦手な6年男子)

(4)　6年女子

運動の得意・苦手に関係なく、「体ほぐしの運動」は楽しくできた児童が有意に多く、「器械運動」は楽しくできた児童が有意に少なかった。運動が得意な集団では、「水泳」は楽しくできた児童が有意に少なく、運動が苦手な集団では、「陸上運動」は楽しくできた児童が有意に少なかった。(表14・15、図11・12)

表14　運動領域別「楽しさ」(運動が得意な6年女子)

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	４４４▲＊＊	１０▽＊＊
体力を高める運動	４３５	１９
器械運動	４１５▽＊	３９▲＊
陸上運動	４３０	２４
水泳	４０３▽＊＊	５１▲＊＊
ボール運動	４２８	２６
表現運動	４２６	２８

χ2 (6) ＝40.717、ｐｈｉ＝.113、ｐ＜.01　　ｎ＝４５４

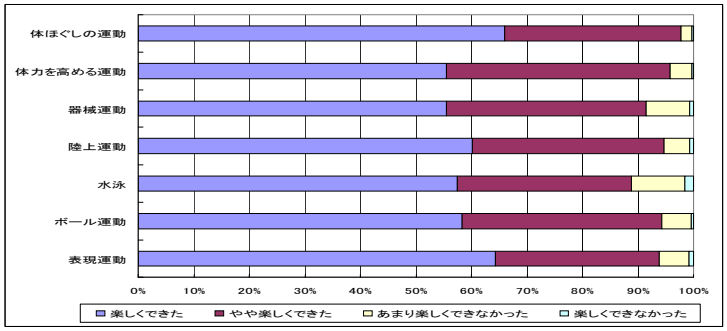


図11　運動領域別「楽しさ」(運動が得意な6年女子)

表15　運動領域別「楽しさ」(運動が苦手な6年女子)

	楽しくできた	楽しくできなかった
体ほぐしの運動	２５０▲＊＊	４６▽＊＊
体力を高める運動	２０３	９３
器械運動	１８６▽＊＊	１１０▲＊＊
陸上運動	１７４▽＊＊	１２２▲＊＊
水泳	２２６	７０
ボール運動	２０１	９５
表現運動	２４４▲＊＊	５２▽＊＊

χ2 (6) ＝82.876、ｐｈｉ＝.199、ｐ＜.01　　ｎ＝２９６

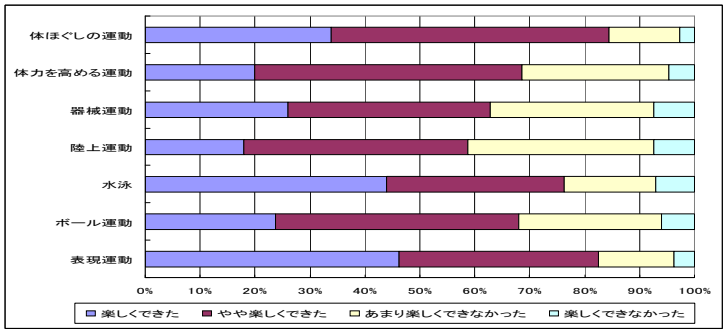


図12　運動領域別「楽しさ」(運動が苦手な6年女子)

注2：表8～15 の▲は「有意に多い」、▽は「有意に少ない」、　＊はｐ＜.05、＊＊はｐ＜.01

Ⅶ　研究の考察

１　「体育授業が楽しい」と「運動が好き」の意識の関係

学年性別に関係なく、「体育授業が楽しい」と「運動が好き」の意識の間に強い相関があった。この結果から、体育授業を楽しくすることで運動好きな児童の育成に寄与することができると考える。また、学年が上がるにつれ運動好きな児童が減少するとともに、体育授業の楽しさが「運動の好き・嫌い」に強く影響を与えるので、学年が進むほど体育授業を工夫して楽しいものにするよう留意する必要があると考える。

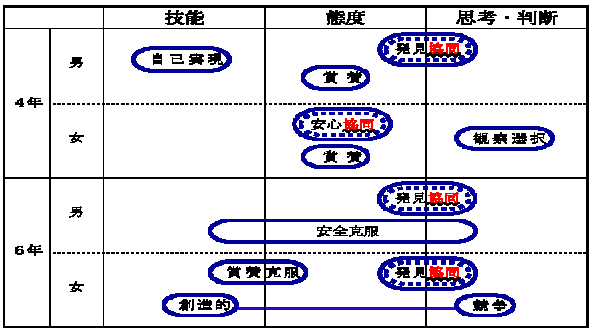
２　「体育授業が楽しい」と「運動が得意」の意識の関係

「体育授業が楽しい」と感じている児童の割合が、「運動が得意」と感じている児童の割合を大きく上回っていること、「運動が得意」と「体育授業が楽しい」の意識の間に強い相関がなかったこと、この２点から、運動が得意でなくても「体育授業が楽しい」と感じている児童がいることが明らかとなった。このことから、児童は「技能」面だけでなく、「態度」や「思考・判断」面からも体育授業の楽しさを感じているものと考えられる。それは、因子分析を行った結果、因子を構成する変数が、「技能」面だけなく、「態度」と「思考・判断」面から選ばれていたことからも裏付けられる。

３　体育授業における「楽しさ」の要因

因子分析により、運動が苦手な児童にとって、「体育授業が楽しい」という意識に影響を与えている因子が明らかになった（表16）。「自己実現」因子は、児童の「できるようになりたい、うまくなって自分の目標を達成したい」という意識によって構成されていると考える。「発見協同」因子は、児童の「友達のよいところから学べるように、友達と関わりながら活動したい」という意識によって構成されていると考える。「賞賛」因子は、児童の「友達や先生から、自分の頑張りを認め励ましてもらいたい」という意識によって構成されていると考える。「安心協同」因子は、児童の「友達と協力しながら安全に気分よく活動したい」という意識によって構成されていると考える。「観察選択」因子は、児童の「友達のよい動きを見て学び、自分に合った場を選んで練習したい」という意識によって構成されていると考える。「安全克服」因子は、児童の「安心してできる場で工夫したことを活かして練習し、できなかったことをできるようにしたい」という意識によって構成されていると考える。「賞賛克服」因子は、児童の「うまくなったりできるようになったりしたことを、友達や先生から認め励ましてもらいたい」という意識によって構成されていると考える。「創造的競争」因子は、児童の「単に競争したり勝負したりするのではなく、チームやグループで話し合い工夫して行いたい」という意識によって構成されていると考える。学年の特徴としては、４年生は男女ともに「賞賛」と「協同」を選択し、６年生は男女ともに「協同」と「克服」を選択していることが分かる。つまり、学年性別に関係なく、「協同」が楽しさの要因として共通に選択されることが特徴である。 因子分析で「技能」、「態度」、「思考・判断」の関連を断定することはできないが、「態度」面の「協同」が核になり、「技能」、「思考・判断」と関連することで体育授業の楽しさを実感させることができると考える。また、「思考・判断」にかかわる項目が、４年生より６年生で多く選択される傾向は、発達段階の違いによる特徴であると考える。

表16　３観点と因子の関係



４　「運動が得意・苦手」と「運動領域別の楽しさ」の意識の関係

各運動領域が「楽しくできたか、できなかったか」を、運動が「得意な集団」と「苦手な集団」に分けて分析した結果、運動領域ごとの特徴が明らかになった。「体ほぐしの運動」は、学年、性別、

得意苦手に関係なく、楽しくできている児童が有意に多かった。その理由としては、怪我の心配がなく安心してできることや友達と関わり合いながら運動できることが、因子分析の結果を受けて考えられる。「多様な動きをつくる運動」は、４年男子では得意苦手に関係なく、楽しくできている児童が有意に少なかった。男子は得意苦手に関係なく「ボール運動（ゲーム)」を楽しくできている児童が有意に多かったこと、因子分析により「発見協同」因子があったことから、友達とかかわり合う動きやゲーム性のある活動を取り入れることで、楽しく取り組ませることができると考える。「表現運動」は、運動が苦手な集団では、性別に関係なく楽しくできている児童が多かったが、運動が得意な集団では、男子が有意に少なかった。苦手な児童が楽しくできている理由は、表現の仕方には自由さがあり、自分なりの動きができれば認められることが、因子分析により「賞賛」因子があったことから考えられる。得意な児童が楽しくできていない理由は、ある程度まで上達すると満足してしまい目的意識が薄れてしまうことが、因子分析により「自己実現」因子があったことから考えられる。それに対しては、上達の段階に応じた適切なめあてをもたせることが必要であると考える。「水泳（浮く・泳ぐ運動)」は、学年・性別に関係なく、得意な集団で楽しくできている児童が有意に少なかった。その理由としては、苦手な児童に対するものに指導が偏り、得意な児童がさらに上達し満足感が得られるような指導になっていないことが、因子分析により「自己実現」因子があったことから予想できる。「発見協同」因子があったことから、得意な児童と苦手な児童との学び合いの場を設定するなどの工夫が有効ではないかと考える。「器械運動」と「陸上（走・跳の）運動」は、学年・性別に関係なく、運動が苦手な児童にとって、楽しくできていない領域であることが明らかになった。その理由として、「速さや高さ・距離を競い合う、自己の目指す記録を達成する」という陸上運動系のねらいや、「技を身に付ける、新しい技に挑戦する」という器械運動系のねらいを達成するために、「協同」や「賞賛」に目が向けられず、技能に偏りすぎた指導がなされる傾向があるのではないかと予想できる。

Ⅷ　調査研究のまとめ

１　研究の成果

どの学年性別においても「協同（友達とのかかわり・学び合い)」が楽しさの要因として認められ、４年生では「友達と励まし合って学び合いたい」という思いが楽しさの中心であり、６年生では「友達とお互いのよさを学び合ってできるようになりたい」という思いが楽しさの中心であることが明らかとなった。つまり、４年生も６年生も楽しさの核は「協同」であり、それが基礎となって技能の向上や思考・判断の深まりを実感したときに「体育授業が楽しい」と意識することが明らかになった。

提言

○体育授業を通して運動の楽しさを実感させることで、運動好きな児童を育成することができます。授業を工夫・改善し、「協同（態度)」を核として「技能」、「思考・判断」とのバランスがとれた「楽しい体育」になるようにしましょう。

○「協同」を核にした授業によって、運動が苦手な児童も「体育が楽しい」と感じます。「器械運動」や「陸上（走・跳の）運動」など、個で活動することが多い領域においても、「友達とのかかわり合い、学び合い」を設定するようにしましょう。

２　研究の課題

今後の課題は、協同に焦点を当てた調査を行い、３観点の関連性や発達段階における「協同の質」の違いを明らかにすることである。

＜参考文献＞

・杉山　重利　編　『小学校体育の授業』　　大修館書店(2000)
・向後　千春、冨永　敦子　著　『統計学がわかる　回帰分析・因子分析編』　　技術評論社(2009)
・小田　利勝　著　『社会調査法の基礎』　　プレアデス出版(2009)